羽根の禿

初演　天明五年(1785)正月　江戸　桐座
作詞　初代　瀬川　如皐
作曲　初代　杵屋　正次郎
タテ唄　松永　忠五郎

〔前弾〕〈三下り〉

戀の種　蒔き初めしより　色と言ふ
言葉は　いづれ　此の里に
誠　こもりし　一廓
丸い世界や　粋の世に
嘘とは野暮の　誤りと
笑ふ禿の　しほらしや
禿々と　澤山さうに　言うてくだんすな
こちゃ華魁に
戀の諸分けや　手管の譯も
教えさんした　筆の綾
よう知ると　思はんせ
おお恥づかしや　恥づかし
しどけ態振り　可愛らし

【挿入歌】宵は待ち（明けの鐘）

宵は待ち
そして恨みて　暁の
別れの鶏と　皆人の
憎まれ口な
あれ　啼くわいな
聞かせともなき
耳に手を
鐘は上野か　浅草か

〈二上り〉

文がやりたや　彼の君様へ
取りや違えて　餘の人にやるな
花の彼の様の
さァて　花の彼の様の　手に渡せ
朝のや　六つから　六つから
上衣　下衣　ひっ重ね
禿は袖の振り始め
つく　つく　つくには　羽根を突く
一ィ二ゥ三ィ四ゥ　五重に七重に
琴は十三　十四　十五　手は間おく
二十　一ィ二ゥ三ィ四ゥ
見よなら　見よなら
松をかざして　梅の折枝
それさ　これさ
それ　好いた三味の手
梅は匂ひよ　桜は花よ
梅は匂ひよ　桜は花よ
いつも眺めは　富士の白雪